

本論文は、明治中期から昭和戦前期にかけて活躍した建築学者・建築家である伊東忠太（1867～1954）の建築理念と設計活動に実証的な検討を加え、両者の関係を明らかにすることを目的とする。

伊東忠太の活動は多岐にわたる。19世紀末から旺盛な執筆活動を展開し、明治42年には「建築進化論」を唱えて、明治期の建築思想を先導した。「法隆寺建築論」を嚆矢とする日本建築研究、東洋建築研究、文化財保存の面でも、その先駆性は大きい。真宗信徒生命保険会社や築地本願寺など、独自の創作活動でも知られ、その他にも、設計競技審査員や帝国大学教授といった職分を通じて、日本近代建築の流れに多大な影響を与えた。これまでも、それぞれの対象は通史的に言及されており、批評的に取り上げられる機会も少なくない。しかしながら、伊東という個人の特質を解明し、それを歴史の中に位置づけるには至っていない。

建築理念と設計活動は、伊東の活動全般に関連し、強い個性と影響力を有することで、第一に検討されるべき対象と考えられる。本論文では、可能な限り論理的な解釈を加えることで、両者に通底する特質の解明を試みた。その基盤として、歴史的事実の解明に留意した。発表された論考を収集し、また、各所に分散した関連史料の渉猟に努めた。とりわけ、大きな役割を果たしたのが、東京大学所蔵の伊東忠太旧蔵史料である。百数十葉の直筆図面や草稿類の発見によって、多くの新事実が明らかとなった。

本論文は、序論、本論3編9章、結論で構成される。

序論では、研究の目的、既往の研究の成果と課題、研究の方法と本論文の構成について述べた。

本論第1編「伊東忠太の建築理念の形成過程」（3章）では、帝国大学入学からアジア・欧米留学までの期間を扱い、建築理念の持続と変容を考察した。

第1章「『有為会雑誌』の論説にみる建築理念」では、『建築雑誌』を中心に旺盛な執筆活動を行なう以前の建築理念を解明する資料として、伊東をはじめとする米沢出身の在京学生が明治22年に結成した「有為会」の機関誌である『有為会雑誌』に着目し、伊東が帝国大学在学中に寄稿した言論を考察した。その結果として、大学入学以前から美術に対する理念を有していたこと、オーウェン・ジョーンズの『装飾の文法』から影響を受けたこと、美術と国家の関係を模索していたことが明らかになった。また、円環的時間と直線的時間、普遍的法則性と人間行動の自由、各国芸術の共通性とヴァリエーション、という3つの対立的な思想の存在が導き出された。

第2章「帝国大学造家学科の教育内容と伊東忠太」では、帝国大学在学中の受講ノートを検討することで、当該期の帝国大学造家学科の学科目内容を初めて提示し、伊東の建築理念に与えた影響を考察した。ノートからは、それぞれに詳細な実務的内容を持ちながらも各論的な、当時の学科目の構成が判明した。覚書きなどから、これが当時の伊東の建築理念と対照的であることが確認された。一方

で、コンドルや木子清敬の講義にはその後の伊東の活動に通じる内容があり、逆説的な影響だけでなく、具体的な継承関係も認めることができた。

第3章「明治中期の未定稿にみる日本建築研究」では、大学院進学から留学までに成立した4篇の未定稿を紹介し、初期の日本建築研究の性格を考察した。その結果、大学院入学直後に、以後の論と対照的な性格を持った「日本建築学」への取組みを行なっており、この経験が「法隆寺」の意義を再認識させたと推定されること、日本建築通史を完成させる以前の伊東が、過去の建築を、より原理的・内在的に、大陸との深い関係のもとで捉えようとしていたこと、彼の中にある美的な嗜好と学問的な嗜好を接続し、世界の建築の共通性と差異を理解するために、日本建築の細部様式における曲線を分析的に論じていたことが判明した。

本論第2編「伊東忠太の建築理念の特質」（2章）では、「建築進化の原則より見たる我邦建築の前途」（明治42）を初めとした、いわゆる「建築進化論」に内在する建築理念の独自性を明らかにし、設計活動との関係を解き明かした。

第1章「『建築進化論』の思想的特質」では、「建築進化論」に直接関連した発表言論の精読を通じて、論が主張する理念と、その具体的手法、および現実との関係を考察した。その結果、「建築進化論」が〈建築＝様式〉を〈生物〉として捉え、内部の相互作用と外部との融合によって、連続性を保ちながら、漸進的に変化するという見解を表明して、近代日本の建築が、そうした線に沿って進むべきと主張したことが明確になった。伊東は、それによって、日本建築の〈主体性〉と、〈継承性〉と〈革新性〉を併せ持つ（べき）近代日本建築の世界史的な独自性を保証している。注目すべきは、設計の自由が、未来への投企として保証されていることであり、「建築進化論」は、建築家の設計の自由を確保する論理としても機能している。手法においても、各国建築の折衷を〈主体性〉の下で正当化している。以上のように、「建築進化論」と、同時期に開始されていた自己の設計活動との、根源的なつながりを明証した。

第2章「『建築進化論』の生成過程」では、新たに留学中の草稿類や帰国後の言論・草稿類を検討対象に加え、種々の想念の中から「建築進化論」が生成されていく過程を追った。その原型は、伊東の最初の海外渡航である明治34年の紫禁城調査の後に現れる。留学における西欧体験は、それをアジア体験を組み入れた「建築進化論」の草稿へと発展させ、続く古代ギリシア建築体験と西欧建築書の精読は、西欧中心主義的な発展段階説に対抗する必要を強く意識させた。さらに、アール・ヌーヴォーとアメリカ建築との出会いが、前進的な論の性格を決定づけた。帰国後の言論・草稿類からは、「建築進化論」中の挿図の生成過程が読みとれる。まず、帰国の翌年に、単一の起源を想定しない「東洋建築系統図」が、相対主義的な建築理念の表現として作成される。帰国後に担当した講義の準備ノートにも、同様の図が描かれており、また、「建築進化論」中の挿図の原型も登場する。明治41年の草稿には、円が重なり合う図の原型が見られる。以上の

検討を通して、「建築進化論」が西欧の建築理念との対決を意識して生み出された理念であり、自らの東洋・西洋・日本建築史の認識を総合するものであったことを明らかにした。

本論第3編「伊東忠太の設計活動の特質」（4章）では、留学後から昭和戦前期における設計活動の特質を明らかにし、建築理念との関係を論じた。

第1章「明治期における創作活動」では、発見した図面史料から、明治期の6作品の意匠と設計経緯を詳らかにした。可睡斎護国塔の初期案や、大連太子堂や三会寺釈王殿の不実施案などを通して、明治末の伊東が、従来考えられていた以上に、多くの設計活動を独自の手法で手がけていたことを具体的に示した。

第2章「明治期における西本願寺関連の創作活動」では、図面史料が確認された西本願寺に関わる明治期の5作品を扱い、不実施に終わった大連別院や鎮西別院などの意匠と設計経緯を明らかにした。続いて、前章で得られた知見とあわせて伊東の創作活動の手法を検討した。その特質は、歴史の中から多様な要素を選択し、それを変形させ、あるいは様式間をつなぐような細部意匠を用いることで、一つの折衷された全体を作り出そうとするところに見出される。細部意匠や立面構成、平断面構成といった各々の要素は、作品の与条件（用途や立地など）との関連を利用して、別個に、可能な限り幅広い歴史的様式から参照される傾向にある。伊東の本領は、こうして選択した相互に異質な要素を、なじませ、組み合わせ、新規の作品を生み出すことに発揮される。要素の接合に、一つの役割を果たすのが、〈火燈曲線〉、〈パルメット文〉、〈蓮弁状隅飾〉、〈動物・妖怪装飾〉といった、伊東の作品に頻繁に表れる細部意匠である。これらは、歴史的様式を個性的に変形したもので、間・様式的な（複数の様式をつなぎ、時には双方に同時に存在する）意味を帯びて、使われていることが分かった。

第3章「大正・昭和期における創作活動」では、図面史料が残る大正・昭和期の34作品を対象とし、関連史料とあわせて検討を加えた。その結果、11作品の形態が判明し、多くの作品の設計経緯が解明ないしは修正された。

第4章「現存作品の考察と創作手法の再考」では、まず、図面史料に基づいた第1～3章では扱えなかった、その他の主要作品について、関連史料をもとに歴史的事実を明らかにした。続いて、大正・昭和期の作品を検討した結果を組み入れ、第2章で明らかにした伊東の創作手法の特質を再び検討した。その結果、明治期の創作活動から得られた特質は、大正・昭和期の創作活動にも、そのまま当てはまることが分かった。加えて、新たに二つの特質が明確となった。一つは可能な限り多様な、中間的な様式を用いようとする傾向であり、もう一つは、洋の東西をつなぐような曲線を多用することである。以上の創作手法の特質は、世界の建築を相対主義的に扱い、多様性と共通性とを見出した上で、それらを主体的に活用しようとする伊東の建築理念と符合するという結論を提出した。

結論では、本論で考察した要約を総括的に掲げ、本論文の結論とした。